# 後篇

# 念佛三昧向果玄談

（大正五年夏名古屋崇德寺にて）

一、教之階位　通互宗教三階

一、自然教　多神教　一體教　自然的念佛

二、超然教　一神教　一體教　超然的淨土教

三、圓具教　統二兩教一高等精神教　圓具的淨土教

二、教之神格

一、一神教　二、汎神教　三、超在一神的汎神教

三、大乘佛教教祖三昧中說

四、本佛と迹佛

五、彌陀實體と化用

彌陀實體……絕對大靈（眞如）形而上實體論の要求

彌陀の化用

宇宙最尊の彌陀……形而上有神論の要求

三昧對象の彌陀……實驗宗教心の要求

贖罪的の彌陀……救濟的宗教心の要求

傳承的の彌陀……傳來歷史の要求

神話の彌陀……幼稚なる宗教心の要求

六、教の宗趣

念佛三昧爲宗、往生淨土爲趣。

見佛往生を宗致とす

見佛二機（一、現身——勝　二、臨終——劣）

往生成佛——佛性顯生の生——全生命の顯現——見佛は其兆候

禪の見性成佛と淨の見佛往生

靈性、理性、天性

## 念佛者の二動機

先日祖山三昧會より歸來の後さる信者よりの問に、先つ頃三昧會中一方の教師は唯往生極樂の爲に口に名號を唱へよ、唱ふればその功德にて死後に往生すと教ふ。一方には只偏に絕對的の大人格なる如來をば御名を通じて大人格に接せよ。現に靈に活くる如來の靈的光明に觸れて現在より活きよ。との教の中何れを取るべきやは吾人の大に惑ふ所なりと。予は之に答へて云はく、

元來如來は絕對にして現未の差別なし。然して我らは本願の念佛に依るとは、本願の念佛とは、我等が南無と呼ぶ聲を現に聞き給ひて、直接に報ひて、心光を以て我を光化し給ふ如來を念ずる所に、本願の意義あることを信ず。今現に我らが肉體の活つゝあるは現に我らに光熱化を與へ給ふ太陽の力あればなり。その如く現に念ずる我らが心靈に對する太陽の如き無量光如來の心光を被りて我らが信

念は靈に活さるゝなり。我らは靈に活きつゝ永遠に向ふ生命の信仰である。小兒が泣く聲に慈母の乳房を與へられて靈の育てを受くるなり。

されば聖善導は口に佛をよび奉れば佛聞き給ひ、身に敬禮すれば佛眼圓かに見給へり。意に念じ奉れば佛はこれを知り給ふ。我らがミオヤを憶念し奉ればミオヤは我等を憶念し給ふ。彼此の三業は親密にして須臾も離れぬなかになる所に念佛の眞意あることを敎ふ。

又、二つの導き方、甲は念佛の功德を積みて、極樂に往生すべしと敎へ、乙は彌陀の大人格を信賴して、慈悲の御名を通してミオヤの慈光に觸れ、現在より靈に活きよと敎ふ。我らは惑ひぬ、二つの中何れに依るべきやと。これに答へて、

何れを是としまた非とするなし。其機類に相應したる方に依るべし。然れども我等如き闇き弱き拙き惡ろき輩は、現に離るゝことなき大悲の親を離れては、小兒の育つことのできぬと同じく、大悲のおや樣を精神的に離れぬやうに、ミオヤの御育てを仰ぐ外なき者なり。思ふに彼の無爲泥洹(ねはん)の淨土に生れての後には毫髮の惡なき御國と聞きつれば假令如來を離れても或はよいかも知らぬ。然れども此世に於ては我ら如きは、どうしても大悲の親樣を離れたならば實に危きもの。

されば我等は無量光如來を一の親と仰ぎ、ミオヤの聖意を意とし光明の御名を呼びて、あなたの光明を被り、光明の御育てに預り、光明のなかに生活させて戴き、而ていよ〳〵命の終りには光明の御許に進みゆくことにて、寢てもさめても光明名號を稱へて、光明中の生活に入り、現在を通じて永遠の光明に進趣せんことをぞねがはし。

されども意樂(いぎょう)同じからず、必ずしも萬人同じかれとは言はれ難し。

## 念佛三義

鎮西流(ちんぜいりゅう)には請求(しょうきゅう)。眞宗感謝。當流三昧。

念佛の要は佛心と衆生心との合一する所にあり。此に救濟融合靈化等の功能あり。念佛三昧を宗と爲し往生淨土を體と爲す。佛心と衆生心との完き結合する時に、佛心は增上强きが故に衆生心を同化す。譬へば闇室に日光入る時は闇去り明來るが如く、如來の日光は衆生の心の闇室を照す。凡夫闇黑の生活が轉じて光明生活と爲る時一切悉く變化す。

佛、生、合意する處に、靈感あり、生命あり、力あり。

鎭西流は此正的(まさしき)合一を未來に期し、佛は西の彼岸に置き自已は東方の穢土にあり。助け給へと常に念佛し念佛の數を定めて歩々に進む。佛生の結合は始よりも、終にありて未來にありとし、臨終の夕に始めて結合す。故に平生の念佛は臨終一刹那の結合の契機を正當にせんが爲にす。若し此一刹那にして契合せざらんか、生涯の無數億萬の念佛悉く徒勞に歸す。平生には我と彌陀とは結合せぬ。聖靈感もなく妙味もなく、唯勞力是我等が本務と爲す。

次に眞宗の念佛は衆生佛性もなく力もなく、唯有するものは罪惡の充滿する處、只地獄に墮落する外なき衆合煩惱に過ぎず。かゝる罪惡の凡夫の爲に阿彌陀五劫に思惟し永劫に苦行す。偏に是我等が墮獄の罪を贖(あがな)はんが爲なり。我等を救濟するの願行已に十劫前に成就して攝取の光明常に衆生を照し給ふ。我等如何に罪深きも彌陀既に贖罪の功成ず。彌陀の願行偏に我一人の爲なりと。彌陀の願意を無疑(うたがひ)、無慮(うらおもひ)、仰いで信受して、一に此眞義を會解(えげ)する時に歡喜無量。此歡喜の一刹那已に彌陀の本願我ものと爲る。十劫の正覺を當念に獲得してよりは已に正定聚(しやうじゃう)。身はここに在りながら已に不退地の聖衆(しゃう)である。故に已に救はれたる身なれば、唯已に救はれた過去を

追回しては感謝の念佛すべしと。是眞宗の過去追回感謝念佛なり。彌陀と衆生との合一は已に歡喜一念、爰に至れば、已に十劫已前に圓滿に成就したる我等が救濟なれば、敢て進むべき功能を要せず。彌陀の大願に歸すれば罪惡も敢て恐るるなし。只報恩念佛すべしと。

鎭西は未來に合一を求め、眞宗は過去已に合す、追回報恩の外に念佛の要なしとす。過ぎたるは及ばざる如く、何れも未來と過去とにのみ中心を立つるが故に正中を得ず。

當流は其中流に立つて而も兩端を統ぶる念佛である。然れども彌陀と衆生との合一を得る迄は、鎭西の如く、專ら若しは念佛し若しは讃頌し、師友知識の指導を仰ぎ、中心主義なる彌陀との正當の合一を期すべく。其合一に於ても、一面より見れば、得たる當念に全體合致す眞宗の如く、平等の方面。一面より見れば、行布門(ぎやうふもん)にて、鎭西の如く如來光明中に在つて向上進趣す。

永劫に彌陀と離れず。過去を追はず、未來を。念々唯卽今の當念、永(とこしへ)に彌陀と合一す。常に彌陀無限の泉源より自已心中に混々として靈泉湧出す。是念佛三昧である。三昧とは過去に非ず、未來に非ず、卽今當念彌陀と合す。念々唯當念、假令無量劫を經るとも常恒の當念彌陀と共にす。彌陀は絕對無限の靈德あるが故に、彌陀の中に在て我等は未來々々に向け當念を離れずして益向上す。

已に得たる過去を追回しては偏に彌陀の大悲なるを憶念して報謝す。

常恒に過去未來を統ぶる現在當念を尊しとす。念々當念彌陀に在りて彌陀の靈力を我當念に實現す。

當念を離れずして念々向上す。未來々々に向つて前途に希望斷ゆる事なし。高遠なる理想は當念を離れず實現せんとす。彌陀は常恒不斷の大活動態なれば念々常恒に當念を尊ぶものに靈力を施す。

吾人は太陽の光熱が千萬年の照したる昔の影を捉へがたし。また明日の光を待つより即今當照の光を用いて滿足す。然ればとて過去の恩を報ぜざるに非ず未來の力を要せざるにあらず。唯現在即今の當念、絶對無限の光を小き吾人の心意に使用する。

充滿されて不足なければなり。

即今當念彌陀合一の念佛。

之れ靈感である。

絶對無限の靈光中の念々、自已に實感しつゝある當念の當念は無量壽にして永遠に斷えざるものと信ず。

# 見性と見佛（禪と淨）

佛教の宗派多々ありと雖も。歸する處二性に過ぎず。自力と他力となり。自力とは自己を發展して宇宙の大我と一致し、他力とは一大眞我に小我を投歸沒入す。甲は自己心中に宇宙の本體を認め、乙は大我中の自己とし、大我小我の調和する處は卽ち一なり。

甲は理性に本づき乙は感情を主とす。甲は宇宙の本體を抽象的に唯一の精神態としこれを自性（じしょう）天眞とす。個人の自己最終の根底が卽ち宇宙精神なれば、自己の本性を發見したる時に宇宙の自性を見得す。此自性より深き玄底あることなし。宇宙萬有は此自性を最終の根底とすればなり。故に此自性を見得する時に正覺を成じたるなり。正覺とは自性を證得したるに外ならざればなり。一切萬有は自性の大用（だいゆう）現前のすがたなり、自性の用（ゆう）を離れて萬有なければなり。故に自性を見たる時卽ち成佛と云ふ。

淨門には、宇宙の自性天眞を阿彌陀如來と名づく。如來を實體より見れば法身佛にして宇宙心靈で

ある。また如來の大智妙用（めうゆう）より如來の智慧と大用とは法界に周徧しぬれば無量光また無量壽と名づく。

また萬德圓滿の表現として相好光明を現ず。相好光明等は如來の智と用（はたらき）との顯現なり。故に相好を見るものは卽ち智慧慈悲の心象を觀る。心象の體は法身實體なれば、また如來の實體一大心をも見ん。

禪に見性を期せざる者は禪門の蠹賊として之を擯斥すべきものなると同じく、淨門に見佛を期せざるものは、徒らに名を淨門に假りて眞を濫す賊なりと云ふべし。

見佛を臨終の夕初めて見佛を待たば何の爲に（以下斷絕）

# 三昧と魔事

魔事とは、行者三昧を修する時、或は內心不調の爲め、安心豫備不完全の爲め、または生理的に腦髓の錯覺妄覺幻覺等の起り易きあり。爲めに精神に異狀を起して、之を三昧中の魔事と爲す、また業相(こつさう)と名づく。信論に或は衆生ありて善根の力なく諸魔外道鬼神の爲に惑亂せらると。

若しくは坐中に於て形を現じ恐怖し、或は端正の男女等の相を現はす。或は天の菩薩の像、亦如來像を作し、相好具足し、若しくは陀羅尼を說き、乃至、無因無果、畢竟空寂是眞涅槃なりと說き、或は人をして宿命過去の事を知り、亦未來の事を知らし、他心智、辯才無碍を得せしめ、能く衆生をして世間名利の事を貪著せしむ。又人をしてしば〳〵怒り、しば〳〵喜んで性常準なからしむ。或は多慈愛多睡多〇多病にして、其心懈怠ならしむ。或は率に精進を起し、後便(すなはち)休廢し、不信を生じ、多疑多慮、或は本の勝行を捨て、更に雜業を修す。若しは世事に着し、種々に牽纏、亦能く人をして諸の三昧の少分の相似を得しむ。皆是外道の所得にして、眞の三昧に非ず。

記に曰く、若し魔の所作を是善相とおもつて、心に執着せば則ち邪網に墮す。若し實に是善根所發の境を魔事とおもつて、心に疑うて、捨離せば、則ち善根を退失して終に進趣なし。是故に邪正實に別を取りがたし。

今且く古德の相傳に依り略して三法を以て之を驗む。

一に定を以て研磨し、二に本に依りて修治し、三に智慧觀察す。

經に言ふが如し、眞金を知らんと欲せば三法を以て之を試みよ。謂く燒と打と磨となり。行人亦爾り。別識り難し。若し之を別たんと欲せば亦三驗を須ひよ。一には則ち當に與に共事すべし。共事して知らずんば當に久處すべし。久處して知らずんば、智慧觀察せよ。

今卽ち此意を借りて以て邪正を驗す。謂はく定中に境相發する時、邪正知り難き如きは、當に深く定に入りて、心に彼境中に於て取せず、捨せず、但平等定に住すべし。若し是れ善根の所發ならば、定力逾々深く善根彌々發す。若し是れ魔の所爲ならば、久しからずして自壞せん。

第二に、本に依りて修治するとは、且く本不淨觀、禪を修するに今則ち本に依りて不淨觀を修す。若し是の如く修せんに、境界增々明ならば、則ち僞に非ず。若し本を以て修治せんに漸々に壞滅せば、

當に知るべし、是れ邪なり。

第三に智慧觀察は、所發の相を觀じ根源を推驗するに生處を見ず。深く空寂と知りて心に住着せずんば、邪は自ら滅すべし。正は當に自ら現ずべし。眞金を燒いて其光色を益すが如し。若し是れ僞金なれば卽當に焦壞すべし。此中の眞僞當に知るべし。亦然り。定は磨するに喩ふ。本治は猶ほ打つが如し。智慧觀察は之を類するに燒を以てす。此の三驗を以て邪正知ることを得べしと。應に知るべし。外道所有の三昧は、皆、見愛我慢の心を離れず。世間の名利恭敬を貪著するが故に」と。

要するに三昧に入り啓示を期すること、宗教的關係を結合し、鞏固なる信念を獲る爲に、正しく恩寵獲得、神人合一の眞を實驗するにあり。最も眞面目に、最も至誠に凝神摧勵するにあらざればうべからず。

若し僅かに光耀を感ずる如きの場合には、堅固にあらざる時は僅かに光耀を感する如きに際して、動轉狂噪して、眞摯なる信心を狂はす。最も愼重すべし。

啓示は自己が解脫を得べき靈的生活過程の光明なれば、全く自己の救濟に對する恩寵なり、之を却つて名聞憍慢の材料の如くにせば、忽ち煩惱魔の爲に心靈撓亂せられん。魔事といひ業相といひ、三

昧修養の不調整より惹起すべき心的現象なり。

三昧寶王論に曰く、問、魔光佛光、自觀他觀、邪正混雜す。願はくば一々之を示せ。對(こたふ)ふ。想に依りて卽ち現ずるを自と云ひ、正と云ひ、想に依らずして現ずるを他と曰ひ邪と曰ふ。謂はく、本白毫を想ふに白毫現ぜざる如き、其本心にそむく。況んや諸想をや。又魔光は影の眼を耀かす有り。佛光は影の眼を耀かすなし。楞伽に云く、照耀盛火の如く、光明悉く徧至、熾炎目を壞せずと。又眞光は念佛の人の身心を澄渟淸淨ならしむ。僞光は念佛の人をして躁動恍惚せしむ。涅槃に澄渟淸淨卽ち眞の解脫（以下斷絕）

# 佛智の靈國

釋尊自から見給へる　佛智の境を明さんと
便ち阿難に教へては　阿彌陀世尊を禮せしむ
時に彌陀無上尊　萬德圓滿し給ひて
光明遍ねく十方の　諸佛の世界を照します
大小諸山一切の　物皆な同し色となり
譬へば劫水彌滿して　滉瀁浩汗なる如し
一切菩薩聖賢の　光はすべて隱蔽し
彌陀光王の光明は　超然として顯(あら)かりき
彼の清淨の國土なる　地より乃至虛空まで
自然微妙の莊嚴は　佛智不思議の所現なり

彌陀正覺の大音は　十方世界に響流せり
光明名號の靈力は　衆生を攝化し給へり
六道種々の垢穢なるは　衆生業識の所感にて
淨土微妙の莊嚴は　佛智の所現と說き給ふ
佛の淨土の中ながら　衆生は娑婆と感ずなれ
衆生の認むる穢土の中　佛は淨土を觀給へり
彼土に胎化の二生あり　佛智を了解せぬ人は
罪福因果を信ずるも　彼宮殿に胎生す
若し人佛智を信解して　聖意に隨順する時は
七寶華中に化生して　智慧と功德を具足せん

# さまやの花

世に百の花よりも殊に勝れて有ゆる花の中に獨りぬきんでて靈(き)よく麗はしく馥(かう)はしきは人の心靈に開ける三昧の華である。

扶桑第一櫻、今夜爲レ君開、欲レ知二花眞意一、三更踏レ月來。とはうら若き女史の心情の花である。そはかぐはしきはかぐはしからんなれども、生理上に咲きそむる花なので難蕋の薫に刺激せられて薫を放つのである。それとは殊に勝りてそれよりは遙かに〳〵優に其色の麗はしき香の妙くしきものは心靈に開く花である。

如來の靈なる和氣に催されて咲きそむる心靈の花は菱草(あやめぐさ)のそれのごと何時でも一切に獨り超然たる天の一方に面を眞向に瞻仰して居る。然れども心靈の花は實に靈瑞花(ぎりやうけ)と同じく容易に咲くものでない。誰しも其種をもちながら、之を培養して無上の花を愛づるに至るものは稀である。けれども既に三昧の花が開くに先だちて、實に金剛石のやうな露の雫(しずく)は、今に咲き初めんとする蕾に先

づかゝるのである。其雫も矢張り天の使として彼より贈與せられたる愛である。心の花は毫も目をふらずして一に東天に昇りかゝる日輪の方に憧憬(あこがれ)て餘念がない。ほのかに閃く一筋の光線は電の如くに今に東の幕を開かんとする前兆ではないかと怪しまる。白き蓮はいつ開くのであらう。蓮は日中でもなければ又薄くらきたそがれの頃でもない。日輪が東の清き海水にて麗面を洗ひながら圓かな顏をほのかに現はしなさる其頃ほひに蓮の花は咲き初む。東の方の葉が一枚パンと音を發しながら開きかけると、日の一すじの光は空を射る如くに、本とうに可憐らしく咲初める。（　）

## 三　昧　妙　樂

秋の時雨に遇ふ毎に漸々に如來の慈光に薫染して竟に滿紅の色を呈するに至りし吾祖の內容甚深。しばらく感情美化の心相を見んか、彌陀のいと暖なる慈光に融合し、麗はしき色は紅の楓、西に入る日の麗はしき紫にほふ赫耀と照りまぼしき如くに輝く。身は此土ながら神(こゝ)は恢廓曠蕩十方に朗かなる樂土に在り。

神人融合の妙容は三昧妙樂不可思議。

法喜禪悅。愛樂二佛法味一、禪三昧爲レ食。

佛法味に皮は敎權文字の解義を以て喜悅の情を發す。更に例せば、佛法の眞如の理とは未だ了解せざりしに自ら切に解を求むるに、一旦貫通する時は手の舞ひ足の踏むことを覺らざるまでに至る。了解の上に喜悅を感ずるは皮膚にて、深く悟達して手の舞ひ足の躍ることを覺らざるに至るは骨髓に達したるなり。尙萬有悉く法性の顯現、實相假○の現象として、萬法見聞覺知として喜悅の材ならざるはなし。

自己が彌陀の心光に美化する時は、自己が彌陀化して歡喜妙樂の彌陀の靈卽ち自己の心情たり。例へば靑眼鏡をもて見る時は萬物悉く靑色を呈する如く、自己苦悶に沈淪する時は觸目歷緣として、皆懊惱の緣とならざるはなし。心瞋恚に充つれば室內器物に至るまで怒の緣ならざるはなし。悲哀に沈む時は外境皆愁情の緣となる。外界は自己感情の現象たり。自己の眞髓彌陀化する時は見聞覺觸として淸淨微妙ならざるなし。卽ち萬物光輝を放つて燦然たり。

カントが所謂、外境は自己觀念を外に觀るに外ならず、實體は吾人に過境たりとは、全分の眞理と

は見るべからざるも一面の眞理なり。自己の主觀を外界に觀るなり。唯識の一水四見また一分の眞理なり。猫の業識を以ては人と猫と同室にあれども。猫には猫の。人は人間の業識を以つて外界を觀る時は人間の觀を出る能はず。

彌陀の恩寵に薫染し久々にして純熟する時は自己の神識全く美化す。彌陀美化の心を以て見ゆる觸覺悉く清淨化す。是感覺美化の心相。

心情の美化歡喜妙樂、

如來不可思議の靈光に融合し、微妙神秘の快感その象相を表せば、自然萬種伎樂あり其樂の音法音にあらざるなく、清揚哀亮、微妙和雅、十方世界音聲の中最尊第一。

また八功德池に神を、調和冷煖、自然に隨意、開レ神悅レ體、蕩除二塵垢一、清明徹潔、淨若二無レ形、寶沙映徹、無二深照一、微瀾廻流轉、灌注安祥、徐逝不レ遲不レ疾、波は無量自然の妙聲を揚げ、其所應に隨ひ、但有り自然快樂の音。

これ三昧微妙の樂。

心情八風に動ぜられず。

# 人の生きる價値

我等は日々に二三萬の米果を糧として活けり。彼の稻の春芽ばえして苗となり夏は苗が繁茂して秋實を結ぶは好き果を結びて能く米を收穫する處にあり。されば我等が日々に二三萬の米粒を糧として稻草の如くに此身體を養ひて人間として萬物の長として活くる所以は、我等が靈的人格の實を結びて永遠の生命に靈に活くべき人格の實を結ぶのが目的である。

かの稻の果を結ぶには太陽の光を被らざれば果は熟すべきに非ざる如く、人の心靈はミオヤの光明を被むるにあらざれば人格靈化すべきに非ず。太陽の光に依つて稻果の成熟する如くに、我等が心靈はミオヤの光明を被むりて靈化す。我等が人生の價値は此心靈に良き果を結ぶ所にある。

日々如何に心を用ゐて向上すべきぞ。佛教の願作佛心、願度生心なり。願作佛心とは人格を向上すべき願望。願度生心はすべてに恩寵を願ふ所以。

光明の中に自己を返照せよ。願くは此光明の時間を聖意に稱ふやうに。

# 活かし給ふ聖意

**アナタ**が天地萬物の設備を以て我等を活かし給ふ聖意により、我等が此身の生活を爲すに就ては、我等は日々に我等が糧となる米も一々皆生命なり。日々に二三萬の生命なる米は彼等犧牲となりて我等が此身體を養ふ。我等は此の犧牲を受けて、之に報ふべきつとめありやを思惟する時は、實に責任の重擔なるを感ず。彼等稻の米果は自ら天の**ミオヤ**の御惠みを意識して此の廣大の恩を感謝すること能はず、されど我等に供し此身となりて、大**ミオヤ**の聖意にかなふつとめを以て恩寵に報ゆる。

されば我等も日々に二三萬の米を食するも、至誠深心に**ミオヤ**の聖意にかなふべき身の行爲と口の言語と意の思想とに於て**ミオヤ**の光榮を現はすべきやうに力(つと)め、我等は此身を盡して、彼の米果が我等に犧(いけにへ)たる如くに、我等は**ミオヤ**に犧(さし)げて仕へ奉らん。また此身を犧(さし)げて仕へまつる目的は、我等が心靈に聖意にかなふ人格の實を結びて、永遠の生命と圓滿なる靈格を結びて終には**ミオヤ**の許に詣うでて、觀音勢至文珠普賢等の諸の聖者の如くに、盡未來際にまで、聖意を世のす

べての人々に知らしめて、ミオヤの光明の中に入らしめん。

## 光明獲得

實に天體は無窮である。また地上には一切の生物は無數に生存してゐる。天體は如何に無窮にても、若し一つの太陽が無かつたならば、天は一切の生物の爲めに大なる力を以て生物を養ふことは出來ぬ。太陽は赫々たる威力を以て地球の如きの惑星に及ぼしてをるから萬物が生きて居ることが出來る。我等衆生の此の肉體的生命を養ひ下さる爲めには太陽が根本である。故に我等の生命は太陽の惠みと力とに依つて活かされて居る。此の肉體は太陽を中心として大威力を仰いで活きて居つても若し永遠の生命なる靈に活くるにあらざれば動物的生活に過ぎぬ。

我々の心靈を永遠の光明に生くる靈力を以て養成し下さるは彌陀無量光如來の光明のみである。無量光如來は靈界の太陽である。此心靈を淸く潔よく快活に圓滿に堅固に靈的に活かして下さるのは無量光如來の光明である。人が最も圓滿なる釋尊の如く、靈的人格として永遠の生命として、活きんと

欲するものは、彌陀無量光の光明に攝取せらるゝやうに一心に念佛すべきなり。

念佛は靈界の太陽なる如來の光明を獲得して光明に活きんが爲めなり。

古來諸の聖者は皆な彌陀の光明によりて靈に活きる人なりき。彌陀は大光明常恒に照し給ふ。

一心に念佛申せば其の光明に接せん。

若し、この光明に接觸するにあらざれば念佛何の功かあらん。斯光に觸るゝものは靈に復活するなり。靈に復活したるのちの生活、身は娑婆に在れども神(こゝろ)は彌陀光明中の人なり。

たとひいかに智慧ありまた豐かなる生活するとも靈に活けるにあらざれば眞の價値なき生活なり。天の大ミオヤよりの賜の中に於て最も貴重なるは是時間なり。此自分に與へらるゝ光陰を無量光の中にます〳〵光明中に向上するやうに心に常に念じてよかし。

## 觀音菩薩（愛と敬）

彌陀の光明を離れて觀音の聖德はない。觀音の人格に輝く聖德は卽ち彌陀の靈光である。太陽の力は天に照り互るも夜月輪がなければ光明を現はすことできぬ。彌陀の靈光は法界に徧照すとも觀音の人格なければ示現ができぬ。彌陀と觀音との關係は相互に離れぬものである。

彌陀は聖子を養成する聖意をかやうに示されて居る。佛子、至心に、我を信じ我を愛し、我國に生れんと欲して、一心に念ぜよ、然る時卽ち聖き人に生れ更らん。と。然れば卽ち如來は已に萬德圓滿して聖子を養成さるゝ靈力は充ちみちてをる。其の德を養成せんとするには至誠心でなければならぬ。

觀音のやうな花のやうな光ある力ある圓滿な完全な品性人格は如何にして形成せられたのでせう、その人格の實質內容はいかに豐饒でせう、其光輝ある品性圓滿なる人格は精神にいかなる滋養分を攝取してをるでせう。

寶冠にいただける寶石あらゆる寶の瓔珞眞珠また胸にかかれる寶石眞珠等の瓔珞は其價千金、あらゆる品性と人格とを以て莊嚴せるすべての精神生活の豐富なる、理想の高尙なる、希望の遠大なる、實に雲中に光彩を放てる淨滿月の如きの人格である。

其の皎潔たる滿月の如くに輝く人格には其內容に太陽の如くに光明の原動力がなくてはならぬ。觀音てふ靈的人格の背景には彌陀てふ太陽の靈格ありて其の光明の反映を觀音に及ぼしてをる。

彌陀の太陽と觀音との關係には信と愛と望とある。

觀音の心には彌陀を最尊第一なる威神光明者神聖なる靈者として彌陀に歸命信順してをる。彌陀を絕對的の本尊として彌陀を奉戴してをる。すべてを捧げて全心全幅を捧げて彌陀を信奉してをる。之を仰げば彌々高く之を鑽れば益堅き如來として尊敬してをる。

宗教心。宗とは絕對的に尊き格に歸命信賴するのが宗致とすれば、實に觀音は無上の尊敬を以て彌陀を奉戴してをる。信心から信仰する時は實に彌陀ほど高遠にして尊き格は在まさぬ。宗教の信心の本尊に對する信仰、客體を尊敬し崇拜して自己と彼との距離は非常に間隔を爲してをる。尊崇恭敬の位が進めばすゝむほど本尊が高く遠くあなたに崇(あが)めて頂禮する。

若し此の尊崇恭敬の念が無ければ宗教心とはならぬ。

あなたを高く崇むほど自己は卑下し謙遜す。

あなたの光明ます〳〵明照せらるゝに、自己の罪惡である卑劣なる、物の數ならぬほどが感じらる

る。自己が無知無力非靈罪惡なることを自覺するに隨つて益々あなたの神聖最勝無量の靈德を尊信する念が增長する。信は進むに隨つて如來に對する無上の尊敬心が增して來る。

次に宗教心の一方に非常に高く遠く尊敬しながら、其內容には反對に益々近く親しく彼此の間に何も容るゝ能はざるの感情が起り來る卽ち是如來を愛する愛念である。

彌陀はすべてに超えて觀音を愛す。觀音はまたすべてに超えて彌陀を愛樂す。

愛は增長するに隨つて益々親近す。

信には畏敬尊崇の遠心力あり、愛には愛慕憶念の求心力あり、子は慈母の胎內に於て養はれ、生後には哺乳せられ、掬養せらるゝ如くに、觀音は彌陀の大慈悲に產出され掬養せられたる聖子であると云ふべき實に麗しき慈愛に富める其品性の最とも高きは彌陀より養はれたる靈德である。故に觀音は彌陀より產出されたる聖子である。產出されたるのみでなく彌陀に養成せられたる法王子である。

我等も日々現に靈に養はれつゝあるではないか。信は歸命頂禮恭敬する、高く〳〵遠く〳〵。愛は相互の間に於て增長すれば益親近する性を持つてをる。相互に結合せる愛の情は實に溫暖なる熱血の通ふ。之に接近せんとして離れんとするも離るゝ能はざる結合である。

母は自已の胎内より暫らく分産したる兒に對して常に溫々たる愛を注いでをる。子がまだ母より分産されぬ前に相互の間に愛情は起らぬ。彼と此と相待の中に於て常に離間せざらんとの愛である。子の愛は益增長するに隨つて愛情もまた增長して愛の狀態に變ずる。

## 愛慕

靈の愛は暖にして且つ麗はしく、我靈には赫々たる輝ける大靈の麗日に衝動されて自ら禁じ難きの感じあり。我が太靈のいと暖なる靈氣のなかに我靈の愛情は融込んでしまふ。春風駘蕩たる和氣に誘致せられて爛漫と笑み初めたる櫻花の如くに、大靈の無盡の靈に充されたる靈氣に催されて靈の花は咲初めぬ。香はしきこと限りなく陽々乎として心の底ひあるを覺えず。

工匠を戀する故にか何處となく耳にちようなの音がするとは俚諺である、感情の眞を穿つてをる。常に大靈を愛念して戀念内に充つ時はすべての觸目對境として大靈を認めざるを得ぬ。赫々たる旭日にも先づ思ひ出ん。火の中水の中萬物の中に於て一切に充滿せる神を見る。

聖典に衆生佛を愛念すれば佛も我等を憶念するとある。我胸の念に存在する神は外一切萬物の中に在ます。我萬物に超えて尊崇する對象物はいかなる處にも在さゞる處ない。萬物に存在せる實在を全く眞實の生命ならしむるものは靈の愛より湧出る信念である。

太陽は自己より分離したる地球に對して千萬年を通じて愛の力は常に呼〇して戀々として捨ること能はず常に〳〵全心の愛を注いて地球を暖めて居る。

太靈はすべての靈を愛して無上の愛を注いでまし〳〵す。經に、如來の慈愛の光は遍く念佛の衆生を慈愛を以て攝して捨て給はずと。

## 欲生

欲生は意志の信仰である。一切生物は悉く活んと欲するを目的とし、活きんがために全力を用ゆ。而して劣等なる物は唯肉に活きるを全生命とす。今至心欲生の念とは、無限の光の裡に永遠の生命に活きんとの欲望である。最高等の理想即ち彌陀の中に生れんと希求し、また最高等なる人格即ち佛に

成らんとの願望である。聖臺鸞曰く、極樂の受樂無間（むけんらく）なるを聞て樂を貪ぼる爲に淨土を求むるは不可である、願くば佛に成らんと。

## 名號佛種子

名號佛種子。名は體を徵す。彌陀の萬德を總括包含する種子の名號。彌陀の靈的精子。

種性に本有と新薰あり。本有は佛性法爾と具す。是先天理性。

新薰。名言薰習。八識中に伏在して自體果を生ずる能力。色心萬法を現象する生產起元作用。

例。植物の種子に生產する起元作用ある事、生物の元形質、種の細胞に入りて種子と爲り一切の枝葉根莖等が元形質中に嵌込式（はめこみ）に伏在して緣を待て發展す。桃杉孔雀人等。元形質に、五體五官乃至一切精神も。

彌陀種子。四智、三身、十力、四無畏、十八不具法等の內證、相好光明說法利生等一切外用（げゆう）、悉く名號種子に嵌込式に成つて、衆生の心地に播下す。之が種子萠發して成果して、終局は彌陀大靈

格と爲るに至らざれば止まぬ。

## 靈の住居

かゝやける玉の宮居もなにかせん、みおやの安きすまいなからば。
とはに住む神の宮居のなきものは、いとゞ貧しき者にてありける。
大みおやの玉の宮居を宿とせば、いかばかりかは心安けれ。
はてもなきかぎりもあらぬ大空に、みてるめぐみをすみかとはせん。
あみだ佛と共にすむ身は法界が、わが胸なるか胸がみそらか。
今はたゞ世に恐ろしきこともなし、大みふところにすむ身なりせば。
世の中に鬼てふものはなしといふ、已が心にすむを知らずに。
恐ろしき鬼と住むこそ苦しけれ、佛のなかのこゝろやすきに。
のどけさを何にたとへん大みおやの、みどのの中にすめるこゝろは。

# 淨　土

本よりもみおやの中に在りながら、迷ひの雲のへだてこそすれ。
迷より娑婆とは見ゆれさとりなば、皆このまゝに淨土なりけり。
常に照る光のなかにすむ人の、心はとはにのどけからまし。
極樂を西にあるとはいふものゝ、さとる心の我名なりけり。
さとりなばいづこも無爲のみやこなり、たゞ西方とのみなをもひそ。
ゆくすえのみ國とのみなおもほひそ、今のこゝろのすまいなりせば
寂(じゃく)光のみやこもおのがすみかとは、みおやを知りてのちに知らるれ。
ここにある密嚴淨土しられぬは、ひとりのみおやまだ知らぬゆへ
寂光のみやこといふも外ならじ、みおやのなかの異名なりけり

## 如來光明歎德章（和解）

かのみほとけのみ光りは、あきらけくして、あらゆる處にきこへぬこともなかりけり。しかれば、ひとり我れいまそのみ光りを稱へ奉つるのみならず、あらゆるもろもろのみほとけも、さとりびとも、もろ〳〵のぼさつたちも、ことごとくともにほめたゝへざるものなかりけり。

若し人ありて、そのみ光りと、みねづと、みちからとをきゝたてまつりて、日々夜々にまごゝろをさゝげて、みすくひをいのり奉つり、心にかけてたへざれば、そのこゝろのねがふごとくに、そのくにに生まるゝことをえて、もろ〳〵のぼさつ、およびさとりびとたちのために、ともにほめたゝへられて、そのいさほしをたゝへられん。そのしかるのち、みほとけのみちをさとり得るときは、あまねくもろ〳〵のみほとけ及びぼさつがたに、そのみ光りをほめたゝへられんこと、またいまのみほとけの如くならんと。

ほとけの曰はく、われあみだほとけのみ光りとみねづのいとたかく、ことにすぐれましますことを

とかんとせば、この世をつくしても、なほいまだつくすこと能はざるべし。

斯光に感合ふものは、心の三の垢も消滅し、身も意も溫和ととなりて、

平和と歡喜に充され、聖き善き心と生れ更らん。

## 如來光明歎德章要解

如來は宇宙の生命なり。聖旨に歸命(したが)ふものは永恒の生命とならん。

如來は宇宙の光明なり。聖寵を光被(こうむ)るものは聖き靈とならん。

六大もとビルの身心と識るときは、宇宙の無限なる卽ち如來の法身なり。然らば卽ち宇宙は外面より觀る時は蒼々たる天地唯物の存在の如くなるも、內は卽ち心靈に充滿せたまふものと云はん。天地萬物に秩序あり條理あるは全知の作用にて、一切の運轉活動は全能の功用(はたらき)にましませり。

全知全能卽ち如來の光明なり。（若し威力と光明とを分つときは威力を全能とし光明を全知とすべし今は總てを光明とす。）この光は天則秩序の理法としまた原動力として一切萬物を產出し活動せしむ。若し宇宙に斯光なからんか、人に精神なきと同じく盲目的死物的、秩序もなく活動もなかるべ

し。然るに萬物に秩序あり運動あるを見る時は、誰か此性能の存在を否定することを得ん。この光天則の理法として萬物を開發するのみにあらず、進んでは一切の生命を向上し聖き靈と成し、終局の目的なる涅槃に攝取し玉ふ理性存せり。ネハンとは永恒不變なる常世(とこよ)の靈界(みくに)。彼處の萬物は光明常に輝き唯光榮と靈福に充さるる處なり。聖典に示せる法藏の本願十劫正覺の方便法身は此目的の光として示現し給ひしなり。三世の佛陀は此目的の光を衆生に教へんが爲に出でたまへり。神靈不測、奇異絶驚すべきものは宇宙一大靈力なり。この光明なり。この光天地に先だち萬物に超えて、始もなく終もなく、永恒本然にして、內に非ず外に非ず、何の時何の處にも存在して、不思議の靈能を現はし給へり。

例へば太陽の能力に光と熱と化合との三線ありて地上の萬物を化育すと同じく、如來の心光には智慧と慈悲と神聖との三靈能まし〳〵て、人の知情意に對して明慧と平和と正善とに靈化し玉ふ德ましませり。

嗚呼熙哉(おゝいなるかな)、靈光の及ぼす處、各其類に隨ふて化を被らざるなし。三惡劇烈の炎は淸凉の風と變じ、天人垢汚の服を濯(そゝ)ぎて聖靈を衣と化し、二乘見思の闇晴れて眞空の月朗かに、菩薩智悲の

日月は自他を雙(なら)べて照し、佛陀果滿の園には正覺の華開けり。されば一切の佛陀は斯光に依て一切智を證し、一切の聖者は斯光をもて永恒の命を得給へり。敎祖釋迦牟尼ガヤの道場に於て正覺を證せし、イエスキリスト、ヨルダンに於て聖靈を感じたる、同じく此永恒の靈光に接したるに外ならず。

ある人が自己心中に在ます神は外萬物の中に存して光を放つと言るが如く、此靈光自然界中に存在す、種々の相をもて衆生の爲に應現す。卽ち聖典に明す處の觀音の三十三身、不動の忿怒、乃至塵數の示現身、皆是宇宙に遍在せる靈力の發現なり。自然萬物の中に活躍したる靈光は機能團體たる人格に在つて聖的活動をなせり。卽ち龍樹天親、ソクラテース、マホメット、智者、善導、空海、源空、の如き靈界の偉人皆此光の人格として現じたるものと言つべし。

宇宙なにものか此光の如き不思議なるあらん、これに因て一切の佛陀は咨嗟して讃嘆し、諸の聖者は絕號して稱揚するまことに所以あり。

諸の賢者よ、願くば我ら一切諸佛の讃稱し給ふ終局目的の光を信じ、如來の聖旨に歸命し、無明の眠覺め、罪と苦より救靈(すくは)れ、共に聖き心となりて、同じく彌陀ネハン界に生じ、正覺の華開き

て、三身一如の妙果を結ばんことを。

## 第一節　如來の聖德

「無量壽如來」「最尊第一」の五句は總標して宗を擧ぐ。如來は宇宙萬有に對して最尊たるに三義あり。

一、如來は絶對的最上者、萬有に超勝せる獨一神尊

二、如來は一切萬物を統攝し、諸佛神明を統一せる大威力者。

三、如來は一切の生命を向上し、終局目的なるネハンに攝取し給ふ大光明者。

譬へば自我が人の精神及び身體を支配する如く、帝王が一國の人民を統御する如く、天體に太陽が諸の星宿の中心たる如く、如來は宇宙萬有を統攝し、一切佛陀天神の最勝尊なり。故に威神光明最尊第一なりとす。

「是故に無量壽佛」の下、別して名を列ねて聖德を表はす。聖德無邊。十二の德名を以て其性能を顯はすに悉く盡さざるなし。

無量光（法身。體大。處として實在せざるなし。）此下三光は如來の體相用（ゆう）の三大として宇宙

に遍在せる性能なる事を明す。法身は宇宙の實體、一切佛陀の本地、諸天神明を統一せる尊體也。斯如來心體を體得するものは卽ち正覺を成ず。

無邊光（一切慧。處として照さざるなし。）如來四智圓明の大慧光は遍く法界を照し、衆生の知見を啓示して無上菩提を證らしむ。

無礙光（解脫の用。處とし化せざるなし。）如來の靈力は、神聖、正義、恩寵の德をもて衆生肉我の束縛を解きて、大我の中に靈的自由を與へ、大ネハンを得せしむ。

無對光。上の三光の力によりて救生れたるものゝ終局に歸する處、上菩提の華開きし大ネハンの都、眞善美の靈界、諸佛聖者の證入する境、常寂光土又は蓮華藏界の名をもて表せらる。諸佛こゝに至りてミダの本覺に還り、衆生此に歸して無上の果位とす。一切に超絕す。故に無對光と名く。

炎王光、世の衆生の惡質を滅殺する光用。衆生に靈性を覆ふ所の惡質存す、卽ち惑業苦（こっく）の三障是なり。惑とは罪惡の要素卽ち煩惱なり。人此煩惱に因て惡業（ごうぎょう）を作す。業因あれば必ず苦毒の果を受く。斯光よく此三障を撲滅すること恰も火炎のよく諸々の不淨物を焚盡すが如し。故に例をもて炎王と名く

清淨光（人の感覺を美化す）此下四光は人の心理に被むる處の光。衆生の眼耳鼻舌身の五官が外界の色聲香味觸の五塵の爲めに染汚さる。然るに斯光に美化せらるる感性は四面玲瓏靈香馥郁、五根清淨にして外塵の爲に惹(ひき)れず。例へば蓮花の汚泥より出でて而も染著せざるが如し。

歡喜光（人の感情を融化す。）肉我の感情は諸々の苦毒と罪毒とに充さる。若し此光に融化せる眞情に平和と歡喜とは如來の泉より湧き、自然の妙樂は天地と共に盡ることなく、心廣く體肝(ゆたた)かに、人生の靈福こゝに於て極みとす。

智慧光（知力に對して知見を與ふ）人の知力は無明にして自ら眞理を悟る能はず。この光衆生に佛知見を與へ神秘の內面を啓示す。卽ち如來の相好光明莊嚴淨土の相、また內包の德たる慈悲智慧等の聖相、乃至眞法身に至るまでを知見せしむ。又一切の三昧智慧神通等は悉く皆斯光より與へられむ。

不斷光（人の意志を靈化す。）人の肉我の意志は我意利己(りこてん)主義にして俗情非靈態なり。然るに斯光に靈化せらるゝ時は聖靈態、高等なる道德意志と成りて向上的には聖意の指導に隨ひ、また自他平等の愛をもて二利(ひとり)を圓滿にす。

難思光（信心喚起の位。）此下三光は人の修行の三階に對する如來の光。如來の靈光玄妙甚深初心

の輩が能く測るべきに非ず、初心は唯一ら不思議の神光を仰信し、斯光に接せんが爲に三心五行をもて恩寵の喚起を期す。

無稱光（心靈開發の位。）若し人三心五行をもて信念を修養し、如來の光に接し心靈開發する時、卽ち如來の聖相（ふみすた）を知見し、また法忍（さとり）を證る。然るに其自證の妙味は言語をもて詮表すること能はず、故に無稱と爲す。

超日月光（聖旨體現の位。）已に心光に感じ、意志靈化し已れば、卽ち如來の聖旨を體し、而して行爲と言語と思想とに於て靈的行爲を實際に爲すべき位なり。

「其衆生有りて」の下、光明十界を攝す。

如來不可思議の光明は遍く法界を照して凡聖咸く其益を被むる。初に人天を益す。衆生の三垢とは貪欲瞋恚愚痴の三毒よく人の心意を垢汚（けがす）すが故に名つく。また三垢とは人の知情意の三能を汚す處の惡質（まか）なり。卽ち知力の垢たる無明と惡知を除きて眞理を明かにし、心情の垢たる苦惱及忿恨等の煩惱を除きて而も平和と歡喜なる心情と成し、意志の垢たる我意薄弱（ないくじ）の意を矯（た）め、高尙なる理想と遠大なる希望をもて向上的に進行すべき道德的行爲をなさしむ。故に「斯光に遇ふ者は三垢

消滅し身意柔輭に歡喜踊躍して善心生ぜん」と。

「若三塗勤苦」の下は、三惡道の爲に拔苦與樂の益を明す。「三塗」とは地獄餓鬼畜生の三惡道を云ふ。若し衆生斯光に背き、邪惡殘害、極重の惡を造る者は、地獄に墮すべき性格なり。嫉妬慳貪を本とし、肉慾我慾、中品の惡を作すものは餓鬼道の業なり。愚痴弊惡にして橫的情操、下品の惡業は卽ち畜生の類比なり。視よ、世に形に於てこそ人類に相似たれ、其情操と行爲をもて判斷を下す時は、餓鬼道畜生道、炳然たるにあらずや。斯る惡道に墮すべき性格なる惡人と雖も、斯光眞理に照され、全く既往の罪惡を自覺し、悔ひ改めて聖旨に歸命する時は卽ち救はれむ。いかにとなれば、大なる慈悲の光は千年の闇室をも忽ちに照破すべければなり。故に三塗勤苦(ごんく)の衆生も斯光に遇ふ時は卽ち解脫を得んと。

「無量壽佛光明顯赫」の下に四聖同化を明す。聲聞緣覺の二乘は自利の小聖、甲は四諦の理を觀じ、乙は十二因緣の法を緣じ、共に見思の煩惱を斷じ、眞空無我の理を悟り、同じくネハンの妙果を期す。斯二聖は此光の消極の方面なる眞空のみを證(さとり)得て已に解脫せりとおもひ、積極の方面は未だ曾て識らざる所なり。

菩薩は覺有情（じかくうじょう）とて、即ち斯光に由て靈的生活をなす聖者なり。斯光の萬德豐備を自己の理想とし、聖旨を實現する爲に益向上し、下は一切衆生を自己と同じく光の生活とし、自他平等の利益を期するものを菩薩と爲す。

佛陀は三身具（ぐそなはる）に證り、四智圓かに照し、斯光と全く一致し、肉我の缺點悉く盡き、斯光と體を一にし、斯光の能力をもて自己の力とし、清淨法身は常にネハン界に安住し、外は身を百億に分ちて衆生を度す、之を佛陀と爲す。

靈異絶妙不可思議なる光明。一切諸佛は斯光に依て正覺を成し、一切の聖者は斯光に由て聖靈と化す。斯光の恩德廣大なり。故に共に其靈能を讃稱して止まず。

## 第二節　修行信心分（如來光明を獲得する修行三階あり）

### 喚起、開發、體現

「若衆生有」の四句は心光の喚起と開發を明す。其光明威明功德を聞とは是如來の恩寵を獲得すべき信念の要素なり。上の如き光明の眞理を聞き、之が信念の動機となりて、宗教衝動（しんかう）として如來に憧がれ、歸命信賴の心意益發達して心光を被り信念を喚起す。

信念修養に三要法あり。三心、四修、五聖行、是なり。

「至心」に三心あり、聖意に相應(かなう)べき心の三德。一、至心に自已の罪惡を自覺り、專ら如來の恩寵を信認む。二、感情に於てはすべてに超えて如來を愛慕し至心に憶念して止まず。三、靈國に生じ聖き世嗣とならんことを欲す。

「不斷」に四修あり。一、如來に對して無上の尊敬を捧げて。二、一行三昧に專ら如來を念じて餘想を雜(まじ)へず。三、聖意を體信し相續して斷せず。四、聖意を體得して終身中止せず。

「稱說」に五聖行あり。一、救世の福音なる聖典をよみ如來の聖德及び淨土莊嚴等を識り以て信念を修養す。二、懺悔と感謝の誠心を表せる朝夕等の拜禮をもて信念を修養す。三、如來の好相(がうそう)淨土莊嚴の相及如來の智悲聖德を知見せんが爲に冥想觀念(しようかんを)もて修養す。四、一心に聖名を稱へ聖旨の現はれを祈り。恩德感謝をして信念を修養す。五、聖歌をもて聖德を讃頌し、また香華珍膳等の供(そなへ)ものをもて而も修養す。

この三要法の中、初の三心は如來の靈應を感じ心光を獲得すべき人の心意にて、四修は信念を鞏固にし完全ならしむる方法。五行は信念修養の材料なり。修養の宗とする處は自已の心意と如來の恩寵

との投合にあり。卽ち自己を如來の光明に投歸沒入し肉我に死し靈我に復活するにあり。要する處若は口稱(くしょう)若は憶念、一行三昧をもて一に如來に心意を注ぎ、心々相續して止ざる時は、若は頓速に若は漸次に如來の心光と感合し、恩寵喚起の機熟し、信心覺醒し心靈の曙(あけ)となりぬべし、之を恩寵の喚起と爲す。

開發。上の三心五行によりて、信心覺醒し、如來の心光をもつて、自己を返照する時は、己が罪惡を自覺し、道心の苦悶を感じ、尙進んで心靈の開發を期する時、心光內に薰じ恩寵の和氣を感じ、七覺心の華開き、妙感靈應の神機四面玲瓏歡天喜地、身心融液不可思議、其內容の眞味は言語道斷(ごんごどうだん)に念慮の絕たる處、こゝに於て全く肉我の罪より脫けて靈我の生命とし、心機一轉たるに及びて卽ち人格の革新なり、之を精神の更生とす。經に「心の所願に隨て其國に生ず」と。

體現。信仰の結果。恩寵開發の目的は心光を體現すべき實行にあり。「其國に生」とは往生卽ち更生なり此に二位あり。精神と及び身體なり。精神の更生とは從前の肉我を轉じて眞我の生命と化(かわ)り、情操一變する處便ち新しき人となる。光明界裡の者として昨日の我と異れる觀あり。有餘(うよ)の依身は變らねど神(こゝろ)は淨土に棲み遊ぶ。聖懷の中に安立する眞情は毀譽八風の爲に動搖されず。既

に精神更生し去て現世界を觀じ來る時は、昨日のそれと異れり。曾て蔑視したる如き厭穢の魔鄉にあらで、是よりは彌向上し目的なる眞理の靈界に進むべき菩薩が天職を果すべき方便修行土なりし。

斯光吾人を自覺せしむるに人生の眞理を以てす。然り而して吾人はいかに聖意を體現せん。いな光榮を現はすべき行動せん。曰く吾人は聖子たる靈我實現の爲にあらゆる力を竭すべきにあり。即ち理想の觀音として我と他とを同一視し、他の苦は即ち己が苦なり、己が樂を以て他に分たんと欲す。正義の意志は勢至と同うし、即ち己を尅(せめ)己を犧(ぎ)げて聖意の現はれにつとめ。己が分を守り他人の福祉を保護し、又眞勇沈毅いかなることに望みても屈せず撓まず。また吾人は不動の智劍を執りて己が貪瞋痴を害し。地藏の愛に傚ひて世の人に待せん。高尙なる理想を文珠の聖童に習ひ、遠大なる希望を普賢(ふげん)の行願(ぎやうがん)に學び。向上進趣、萬善萬行をもて此土に樂邦(らくに)を實現せん。惡人の迫害は心靈を研くの利器。一切の誘惑は尅己忍耐の試檢具。

若し現世界を以て目的ある階梯なる修行土と觀じ來る時は菩薩六度萬行を修すべき諸の器具が全備せるに非ずや。經に此土一日の修行は淨土に於て百歲するに勝れりと。吾人は斯る大利なる此土なることを自覺するが故に、寸陰を寶とし、己の本務を竭さんとすべく、然り而して方便土(ほうべんど)のつとめ

を全く卒(をは)る日には、必ず目的たる實在の報土、即ち無餘涅槃界(よきはの)に歸る期あるを信ず。

經に「其國に生じ諸の菩薩聲聞大衆に共に歎譽して其功德を稱せられ」とは蓋し精神更生し已つて聖旨實現の爲に活動せる人を稱するなり。

身體の更生。已に更生したる精神は如來大心光中に理想の淨土に逍遙(あそ)ぶものゝ、肉の有らん限りは自然の約束を全く脱する能はず。彌方便(ほ)の業(つとめ)を卒る曉には、無明生死の夢醒て大ネハン城にて無上菩提の宮に住し、眞善美妙の園には常樂我淨の華鮮かに、四智圓滿の日は明けく、三身一如の月清らかなり。然るときは即ち體は本覺(ほんがく)の都に在つて、化(け)を百億に分ち、こゝに於て一切諸佛は即ち本覺の彌陀。彌陀即一切諸佛たるの眞理は自ら證らん、

## 修養のすゝめ

諸賢よ、心靈修養の要に祈禱拜禮、念佛三昧、坐禪工夫等あり。是らの方法により　如來の光明を獲得し、聖き人となり善き生活に至るを目的とす。禪の大悟見性、他力門の信心開發、キリスト教の精靈に感じたりと曰ひ、名を異にすれども歸する處此光明に接するに外ならず。斯光を感得して初めていける信仰に入りたるものとす。されば求めよ眞理の光明を。

# 十二光讃（註—既發表と異る所あり）

無量光　法身德

清淨法身毘盧舍那佛　周徧法界一切處
唯一獨尊と統攝と　終局歸趣の理性なり
遍空遍時永恒の　自中存在心靈態
絶對にして規定なく　內容豐饒無盡なり
產出門には天則に　全知全能の權をもて
秩序は因果律にして　一切を生產擔保せり
攝取門には法身と　智慧と解脫の德をもて
衆生のこころをえらみては　開化し終局ここに歸趣せしむ

無邊光　般若德

十方三世一切の
如來一大觀念の
物心無量差別の性
平等理智の方面は
內容重々無盡藏
能所感應に啓示すを
如來作智の光明に
五妙至美の靈覺は

無礙光

如來無礙の光明は
世界規定を解脫して
神聖眞理のみ光は
人の心靈に嚴臨し

物心二象はことゞく
鏡の影像(かげ)に外ならず
能力所變の性にして
常恒不變一如性
甚深神秘難思議
妙觀察智とは名づく
見聞覺知ことゞく
淨土にあらざる所なし

解脫德

無上道德態にして
大我の中に自由を得
無上權威にましませば
道德自律の基なり

如來の正義は我を捨て
えらみて攝取し聖道に
恩寵(めぐみ)は罪の中よりも
心靈育(はぐくみ)聖子(みこ)として

聖意(みむね)に協力する者を
正義(しき)つとめを果さしむ
解脫し靈化よみがへし
無上道に到らしむ

無對光　　佛身土

無對如來自境界
至眞至善至美なる
もと身心土不二なれば
自然微妙の莊嚴は
常住安樂我淨の
凡夫にたいして秘密故
重々無盡蓮華藏
如來本自居所にて

極樂無爲涅槃城
最終眞理の靈界(みくに)なり
常寂光土とは名づく
感覺心像の淨土なり
四德の極まるみくにとも
密嚴刹土とも名づく
是十佛の自境界
衆生最終の歸所なり

## 炎王光

如來炎王光明は
靈性を覆ふる一切の
法般は無明と所知障と
解脱のちからに苦惱(くるみ)と
衆生の惡の根本は
天性と肉の質なると
または病的惡弊症
一切罪障こと〳〵く

三德圓かにましませば
垢障を照破し給ふなり
見惑の障りをかきはらし
罪惡の障りを除くなり
主我幸福に偏すより
すゝみて主我の惡となり
瘴氣團體の罪惡と
解脱し照破せざるなし

## 清淨光

如來清淨光明は
心眼内外に映徹し
心の耳は洞(ほが)らかに

衆生の感性を靈化せり
四面玲瓏かがやけり
十方圓かに虛徹す

法嗅常にいと妙に
心舌(こぜ)に味ふ三まやの
觸覺内に安らかに
五つのちりに交るも
五妙感覺靈界(むいとろつくし)に

馥郁としていさぎよし
禪味の甘(うま)さかぎりなし
身うるほひて體ゆたか
心はきよきみ光に
逍遙としてすみ遊ぶ

## 歡喜光

おゝよそ人の感情は
ひそめるまよひきそい出て
世は内外にくるしみと
解脫は己がまゝならず
神秘融合いとふかく
恩寵(めぐみ)に安立しぬる身は
六根常にきよらかに

八つの苦み身を責むる
自他を〇るすことはげし
罪と〇かくにみちみてり
如來眞我に歸命せば
三まやの樂みみようなり
平和と歡喜にみちみちて
おもてはおのづとうるはしく

内に靈福感ずれば　外(と)にあらはるれあらわるれ

智慧光　知見開示

如來智慧の光明は　衆生の知見を開きては
甚深秘密の内容を　啓示し悟入せしむなり
感覺としての啓示には　華香明相ルリのいろ
相好光明寶樓等　依正二象を示さるゝ
神聖正義慈悲と智慧　如來無上の靈象を
三昧正受の内面に　觀察たえに啓示(しめ)さるる
如來自性法身は　卽ち毘盧遍一切所
甚深秘密の妙相を　しめさるるなり悟るなり

不斷光　意志靈化

如來不斷の靈能は　無上道德態にして
衆生の意志に被むれば　解脫靈化きはみなし

主我幸福と俗情の
靈化は金剛の意志にして
教主の聖旨を體しては
望は四弘の海ひろく
願作佛心願度生
一切衆生をもろともに

難思光　　恩寵喚起

如來甚深境界は
たゞ神宗(とう)に憧憬(あこが)るる
聖經を讀と拜禮と
工夫冥想觀念と
垢障覆深(ふかい)の身なりとも
至心に專ぱら如來に

非靈の素質を排除(のぞ)き
聖意實現(あらはす)行動(つとめ)なり
二利圓滿を期するなれ
六度八正道なおく
願度生とは願生心
至善の所にいたるなり

初心難思難解(げ)なり
恩寵をいかに喚起せん
欣求(ごんぐ)感謝の稱名と
讃美と供養を靈糧(かて)とはす
尅克摧勵切にして
欽慕の心深ければ

招喚(まねき)のみ聲いと妙に
無明の夢の覺醒(さめ)ぬれば

無稱光　　恩寵開展

靈光妙に照りませば
良心苦悶の度は昂(たか)む
恩寵を獲得せん爲に
聖意(みむね)の實現(あらは)いのりしに
靈應交感いと妙に
こゝろも言も及はじな
心機一轉卽更生(きたなきこゝろにとよみがへり)
如來(みくみ)の眞我(なた)に安立し

超日月光　　恩寵體現

慧日の光は明らげく
微光閃き來るとき
心靈(こゝた)の曙曚(あけ)とはなりぬべし
罪惡ふかきを自覺しき
解脫は自己のままならず
三昧に神(こゝろ)を凝してぞ
七覺靈化(のはな)開く時
神秘融合不思議なり
廓然として覺醒し
永恒(とは)の生命(いのち)に入りぬれば
聖子(みこ)の數とはなりにけり
慈悲の空氣(みそら)はあたゝかに

聖旨を被むる聖子(みこ)として　いかに天職を果すべき
恩寵の中にたゆみなく　上求(じょうぐ)菩提下化(げけ)衆生
智悲の日月の下にして　自他の利益をはげまなん
教主應化の迹高く　五十餘年の健闘と
三輪完徳(さとか)の鑑(かがみ)は　即ち我等の軌範なり
望はすべてともろともに　至幸の所にいたらしめ
行(つとめ)は聖意の指導にて　至善に向ふて進まなん

## ときはのみくに

いとも聖きみ光に、無明のやみははれにけり。
あまつみそらはほがらかに、ときはのみくにあらはれぬ、
雲にそびゆるたかどのは、こがねしろがねまに眞珠、

るり寶石のしようごんは、てりかゞやくことかぎりなく、
たからのうえ木に玉の枝、こがねの花は咲きにほふ、
みそのにあそぶたのしみは、無爲のみやこの春ながく、
かの涅槃界のさかいには、のどけさ有無をはなれにき、
心に染むる慈悲の色、分身利物きはもなし、

## とはのいのち

上なきめぐみをえたる身は、常恒生命(とはのいのち)によみがへり、
有爲の穢身にありながら、理想の淨土にすみあそぶ、
聖子のつとめをはたすため、みむねのまに〳〵おこなはん、
有餘の依身の脫(ぬく)る時、きよきみくにはあらはれん、

# 久遠實成と十劫正覺

大小彌陀經共に彌陀成佛已來於今十劫と。然るに垂跡釋尊已に久遠實成を本門とし伽耶成道を迹門と爲す。本地の彌陀云何ぞ本迹なからん。然るに經に十劫正覺を說くは何故ぞ。

答。宗教の心理○○の解脫としては實行としては本迹の論なし。但彌陀恩寵を信仰せば解脫融合し靈化して度を得べきが故に本迹の論を要せず。殊に實行的信仰としては、しかり。經は衆生の爲に慈悲の手を伸べ、近く十劫正覺の迹を垂れて攝取の手をのべて衆生を攝受せんが爲め。

形而上論卽ち學說とは本門久遠實成の理より說き來らざれば理盡しがたし。

西藏聖典に曰く阿彌陀佛は釋迦佛の本地なりと。法華壽量品の本門、久遠實成、無量壽とは卽ち阿彌陀佛なり。釋尊は表面より見れば個體の人格、伽耶成道を示せども、內面は卽ち精神は絕對にして無量光壽卽ち阿彌陀なり。釋尊の精神は主體と客體と致一し、彌陀の眞我の中の釋迦にして、已に小我亡じたるを以て其精神卽ち彌陀なり。此の彌陀とは法の彌陀なり。

經に、我得佛來、所經劫數、無量無邊阿僧祇劫。又慧光照無量と。即ち釋尊の精神は〇〇〇即ち無量光にして又無量壽。〇〇〇阿彌陀佛なり。

大乘圓滿修多羅一佛乘の實義には一切衆生は悉く法身如來藏を根底とする個人にして、根底より云はば全體一體にして、皆法藏にして、個々の衆生は法藏の分身にして、一衆生として彌陀の子ならざるものなし。

これ佛性即ち理性の方面より見ればなり。

人々自己の根底法身如來藏にして之を開展せば無量光壽の果海に歸入すべき理を意識せざるものは之を迷沒の衆生と名づく。自己の根底の眞理を識らざるが故なり。

至極大乘の意は、一切衆生皆一佛乘の性を具備せざるはなし。最深の根底を一にして歸趣を一にして中心を一にす。

個々は、佛性卽ち絶對無限の心性を以て自己の根底とす。此見地より見れば、一切衆生悉く同一の體ならざるなし。故に一切衆生成佛せざれば我成佛せじと。法身如來藏無盡の故に衆生無盡なり。衆生無盡の故に、法藏の願行無盡なり。一切衆生は法藏の根底よりいでて法藏の願行の分を盡し、法藏は盡十方無邊の法界刹土衆生界を以て一人とす。一切卽一の一人なり。法藏は精神生活の人類なり。

法藏の願とは個々の法藏を開發して無量光壽を開示せんが爲に、眞善美の靈界を顯さんが爲なり。法藏の本質は一切衆生の本體なり。絶對の精神なり。願行とは○絶對精神の勢力なり。全能なり。一切衆生の精神に宗教的神的活動せる勢力なり。之を願と云ふ。人々神的欲望は之法藏の願なり。神的行爲は是行爲なり。法身無盡の故に衆生も無盡盡未來際常に衆生を度す。之は法藏の本體及び性能とす。

時間的に因分圓滿して果顯はれ、果顯るゝ時因○するといふ如きは、生滅を見る妄見に墮す。大乘の實義は因果同時に、同體の異方面。因の方面は常に因位。果の方面は恒に果分。之を實義と云ふ。

果は時間的に暫く果といふ。空間的には客體の方面なり。是佛果の神の方面なり。終局歸入の方面

を統一して、無限光壽と云ふ。卽ち絕對神格なり。能攝○萬德圓滿の顯るる所なり。最終の歸所なり。

主體が終局に眞理にかなうて、客體の恩寵に攝取同化せらるゝときは、悉く歸して無量光壽に入る。已に之に歸入する時は、表面は個體の如くなるも、內面は同一の無限の光壽、絕對の精神なり。一切慧なり。光明なり。神靈態なり。

果海に歸入するときは、無限の光壽に解脫靈化して、一切の聖靈悉く一の光壽となるべし。故に阿彌陀經に彼の佛の壽命及び其の人民無量無邊阿僧祇劫なり。故に阿彌陀と名づくと。

光明壽命と其精神的本質に於ては一切卽一の故に同じく阿彌陀と云ふ。

然れども、一卽一切の故に、差別の世界には十方恒沙の諸佛菩薩等と現じて主體の方面より客體の方面に濟度す。

主體卽ち因分の本體と果位の實體とは其本質に於ては同じく絕對精神態にして、神の方面より見れば、絕對無邊の一元にして異にすべきものに非ず。而も主體の所造者より見る時は個體にして無明の素質の爲に覆はるるが故に、無限に對する有限、無碍と有碍と正反對なる位置に在り。

法藏の法身は十方三世一切の衆生を身體とす。法身如來藏は〇異に非ずして無量の刹土無量の衆生を現す。個體と現ずるものは悉く無明の爲に覆はれて個々の體を執して實我の見を起す。個々本是れ法身如來藏性なるを識らず。故に是を迷と云ふ。個々は如來藏性にして之を開顯する時は無限光壽と解脱靈化せらるべき理を信じて、專心一意に彼に歸命信順して、それと致一融合安立すべきに到るを宗教信仰と云ふ。

法の法藏とは全法界の主體にして、時間に云はゞ因分なり。佛の彌陀と云ふは全法界の客體にして、卽ち因果門には果滿に位す。果と云ふも人類より名づけたるものにして、法には、彌陀は淸淨本然にして、自性、天眞、暫く主體の方面より、因果を超絶したる境界に、自己の位より名づけたるに外ならず。

因果の位とは實には同體の異方面にして、衆生界の方面は無始無終の因位にして一切衆生悉く法身如來藏性の個體なるを以て常に因分にして、佛界の方面より見れば、無始無終に妙覺果滿の無限の光壽なり。但に時間的に法藏は已に成佛して彌陀となりし後は、法藏の因已に亡じて、果〇成ずとし、成佛せざる時は法身の彌陀實在せざるを說くは是方便隨宜の說なり

# 淨土の本體

淨土の本體は本より絶對精神態卽ち眞諦平等一法身なるも、現象の質としては大に異れり。淨土は直接に本質より理に如(ゆき)うて現ずる處、穢土は唯心所變の物質と心象との二素質混雜せり。されば とて物心二元說にはあらず。唯心一元所變の二質なり。淨土は精神所現の無漏の莊嚴にして眞理の靈界なり。故に穢土は感覺世界なれば感性○○○淨土は觀念世界として心眼を以て觀ずべし。

相卽無相の法門、七寶莊嚴を離れて第一義諦妙境界を求むるは是空に偏す、圓滿大乘の實義に非ず。經には淨土の本質を說いて國如二泥洹一、而無等雙。又云く。彼佛國土、淸淨安穩、微妙快樂、次二於無爲泥洹之道一、彼國人天、超世希有、容色微妙、非レ天非レ人、皆受二自然虛無之身、無極之體一

彼國及衆生等は表面よりは七寶莊嚴と微妙端嚴の相の現象を表すと雖、其本質は法身知相にして靈妙なる精神態にして、たとへば大圓鏡智の法界周遍態なり。故に其表面の身體も精神も國土も同一の

本體にして、身土心に非ず、絶對の精神態なり。

此絶對精神の本體に不可思議の性能ありて個々の國土と及び個々の人類等と現象す。此現象に自ら淨穢ありて淨の方面は自性に稱ふが故に、穢の方面に現ずるが如きの物質との混雜現象に非ずして、純粹精神が本質より直接に顯現したる妙色莊嚴の國土及人類なるが故に、表面には個々分々に現ずれども其内面は平等一味の清淨法身智慧の精神態なるのみ。されば國は泥洹と云ひ、虛無無極の身といふ。

身心土無二無別にしてまた〇〇自在なり。而して法身智相は常住永劫不變の故に、現象は種々に變現すべきも、〇〇本質にして不滅なるが故に現象も窮盡あることなし。

導師の淨土寶地の讃に、西方寂靜無爲樂、畢竟逍遙離二有無一、大悲薰レ心遊二法界一、分レ身利レ物等無レ殊、或現二神通一而說法、或現二相好一入二無余一變現二莊嚴一隨意出、群生見者罪皆除、

西方とは、問師曰く、西方とは自性、卽ち絶待精神、寂靜は一法句、無爲樂、（無造作、天眞）畢竟（依正莊嚴無窮）逍遙とは、畢竟は自内面の自性にして、逍遙は遊化の現象、離有無とは有は圓成實性なり無は依他起の現象、離とは無差別、大悲薰心より下は、裏面は絶對精神にして表面には現界

に於て種々の〇相を現じて、彌陀の自性より現象せる人類をして種々に方便して終局目的の光に攝せしむ。種々無量の身を現ずるも、裏面に常に一體にして、又國土身心を現す。表面には常に現相好、裏面は無余なり。現象を捨てゝ無余に入らず現象のままにして常に裏面は無余なり、無余の〇〇常に現象す。

當處極樂とは本來極樂は彌陀の依果にして、其體は絶對にして常寂光土、一切處として極樂にあらざる處なし。されども、淨土は無漏界なれば物質的感覺界に求むべからず。物質と主我の迷執を捨て、精神的に彌陀の觀念的に入る時は、天然の主我を脫して彌陀の靈界に相應する時は、十方法界處として淨土ならざる處なし。故に感覺世界を超越し彌陀觀念世界に入る時は當處極樂にして處として極樂ならざる處なきが故に十萬億土のみならず百萬千萬悉く極樂ならざるなし。

無對光　終